

かんのん劇場ご愛好の皆さま

9月になりましたものの相変わらず肌を刺すような厳しい残暑が続いておりますが、皆様におかれましてはお変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。

さて5月に開催いたしました世界的二胡奏者、許可(シュエイ・クウ)さんによる特別演奏会はお陰様で大盛況でした。久しぶりに聴いた方々からは「一段と深みの加わった音楽性に驚いた」という感嘆のお声を、またはじめて許可さんの二胡に触れたという方々からは「二胡のイメージが覆された素晴らしい演奏だ」との喜びのお声をいただきました。支配人としては本当に嬉しい限りです。

その折りにお知らせいたしましたように、第26回かんのん劇場を表記の通り行います。東京フィルハーモニー交響楽団首席チェリストとしてご活躍の渡邊辰紀さんには、2012年11月の第19回かんのん劇場にご出演して頂きました。その時には音取りがためらいなくスパツ、スパツと見事に決まるので、音に濁りが無く、したがってバッハの音楽構造がとてもよく聞き取れたのが印象的でした。今回久しぶりに本格的なクラシックを聴いていただきたいと思い、渡邊さんに再出演を打診しましたところ、快諾して頂きました。

クラシック音楽に馴染みの薄い方には、バッハというのととても難しそうに聞こえるかもしれませんが。しかしバッハの音楽は物語性よりも音楽そのものに語らせる力があって、どんな心の状態の時でも受け容れてくれる懐の深さがあります。ですからいろいろなかたちにアレンジされていて、CMなどにもよく使われていますから、思いのほか身近な音楽だと思えます。アインシュタインは「バッハを知らない人は幸せである。なぜならこれからバッハを知るといふ喜びがあるから」と言ったとか。「バッハ？うちは間に合ってます！」などとおっしゃらずに、ぜひお運び下さい。とりわけこの無伴奏チェロ組曲集には、丁度墨一色で無限の色合いを表現する墨絵にも似た、味わい深さがあります。生演奏の持つパワーと共に全身で感じ取って頂きたいと願っております。

なお席には限りがございますので、お早めのお申し込みをお願い致します。

かんのん劇場支配人兼普門庵住職
見城宗忠

【渡邊辰紀さんのプロフィール】



5歳より才能教育研究会にてヴァイオリンを始める。その後チェロの存在を知り、腰掛けて練習できるという理由により転向。自分のお年玉をはたいて当時15,000円の1/2サイズのチェロを購入。日本人で最初のパブロ・カザルスの弟子、故佐藤良雄氏のもとで手ほどきを受け、以来チェロの魅力にとりつかれ、まっしぐらにチェリストへの道を突き進む。そして血のにじむような努力の末東京芸術大学附属高校に入学し、ストリートで東京芸術大学に進学する。

在学中は優秀な学生に贈られる「安宅賞」を受賞したり、日本音楽コンクールにも入賞する等華々しい成績を修めるが、驕ることなく2年間も修学期間を延長し、それでもあきたらずどこか外国で勉強してみたいと漠然と考えていたところへ紹介して下さる方があらわれ、渡りに舟とばかりにドイツ行きを決行する。

留学はしたものの最初はヨーロッパのレベルの高さに圧倒され悶々とした日々を送るが、ヒツァカ音楽祭で初演した新進気鋭の作曲家トビアス・PM・シュナイトのクラリネットとチェロとピアノのための[Cascando II]で「観客賞」を受賞。そのメンバーで[Trio Cascando]を結成し、バイエルン放送、ドイツ放送等のFMに出演の他、ソロコンサートやオーケストラとの共演等、着々とキャリアを積み重ねていく。そして6年間の研鑽の締めくくりに、ドイツ国家演奏家試験でフリードリッヒ・グルダのチェロ協奏曲を演奏し、特別賞付きで合格。同時に北西ドイツフィルハーモニーにソロ・チェリストとして入団。10年間在籍し、「ドイツ国家室内楽演奏家」の称号を得る。

2006年夏、16年間のドイツ生活にピリオドを打ち完全帰国。東京フィルハーモニーに首席チェリストとして入団。オーケストラのみならず、ソロ、室内楽と幅広く活躍中。また、内外のジャズフェスティバルで井野信義、高瀬アキ、山下洋輔、ニルス・ペデルセン等、超一流ジャズミュージシャン達と共演するなど、クラシックだけにとどまらない多彩な演奏活動は高く評価されている。